

第70回愛知県公立大学法人評価委員会会議録

1 日 時

令和7年7月3日（木）午後2時から午後4まで

2 場 所

愛知県議会議事堂 5階大会議室

3 出席者

委員 4人

説明のために出席した者 13人

4 傍聴者

0名

5 議 題

- (1) 2024年度業務実績について
- (2) 第三期中期目標期間における業務実績について
- (3) 役員報酬規程の一部改正について

6 議事概要

【2024年度業務実績について】

- 愛知県公立大学法人の2024年度の業務実績について、法人からヒアリングを行った。

【第三期中期目標期間における業務実績について】

- 愛知県公立大学法人の第三期中期目標期間における業務実績について、法人からヒアリングを行った。

【役員報酬規程の一部改正について】

- 「意見なし」とした。

【質疑】

- (1) 2024年度業務実績について
- (2) 第三期中期目標期間における業務実績について

○ 委員

資料3 データ集P18-19の科学研究費補助金等の申請状況、新規採択率について、概要資料で芸術大学は申請29件のうち採択13件となっており、かなり良い率なのかなと拝見しましたが、科研費に関して拝見しましたら、資料の見方が少し分からなかったのが、P19の2024年度のところに2023年度申請分と記載がありますが、これはまだデータが出揃っていないためということでしょうか。資料作成時にまだデータがなかったので、2023年度申請分の件数が載っているという理解でよいでしょうか。P18の芸術大学の科学研究費の申請数が10となっていて、P19を見ると新規応募件数が11となっており、ここの数字の不一致が何かかなと思って見ていたら2023年度申請分と記載があったので、こういうところから持ってこられた数字なのかなと思いました。

29件中13件というのはかなり良い採択率かなと思ったんですけども、科研費に限ってみると11件中1件ということで9.1%の採択率で、他の芸術系の学部と比較しても、少し採択率が低めにとどまってしまっているのかなというところがございまして、13件採択中12件は科研費以外の外部資金ということになると思うのですが、その外部資金というのは例えばどういうところからの資金なのかなと。科研費がいいと言ってるわけでは決してないんですが、その採択された12件の外部資金というのは、どのような資金だったのかというのを教えていただきたいというのが、芸術大学への1つ目のご質問です。

県立大学の方には、2025年度から研究費配分に関する新たなインセンティブ制度を実施するとおっしゃっておられたんですけども、これは大学横断的なものなのか、例えば名古屋大学ですと、部局の自治がかなりありますので、局ごとに、例えばその基盤B以上を取った教員は個人研究費を割り増しで配分するとか、部局ごとのインセンティブ制度をとっていることはあるんですけど、まだ私が知る限り、大学横断的な科研費配分に関するインセンティブというのではないように思うので、もし大学横断的なものなのであれば、それはどういうものなのかということ、参考までに私の個人的な興味もありまして教えていただきたいということと、もしそういうことが芸術大学でも採用が可能であれば、科研費の獲得率がもう少し上がるように工夫をされるということが可能であれば、そういうことをご検討されるということもあり得るのかというご質問でございます。

データの細かい数字の点はまたお分かりになったときに教えていただけれ

ば結構でございます。

○ 大学法人

このインセンティブをどうやってかけて高めていくかというのは、長く議論があり、どこの大学でも悩ましいところだと思います。これまでは学部ごとに、どういう種目の研究費を獲得したかというので学部配分をしていたんですけれども、学部ごとの違いが非常に際立ってしまうところもあり、例えば、かなり申請したり取っていたりするところもあれば、母体も教員の母数も違うんですけれども、大きいところほどだんだん減ってくるところはそういう母数の事情はあるんですけれども、そういうところがあったものですから、一旦それを、わかりやすく言うとガラガラポンして議論を重ねた結果、まず科研を獲得するための支援、科研を出したことがない人たちに、例えば業者の添削とか面談とかいうことを通じてという支援と、新しく来た教員に科研を出してもらおうということで、研究環境の整備というような名目で1人幾らという形で出すというのが2つ目と、最後のところが科研費採択実績インセンティブ、要するに残りの額を、現在科研費をとっている人たちにリリースというか、A B C Dのカテゴリーに応じて配分していきました。個人に、学部を問わず配分していくことによって、出したことがない人への支援、それから新しく来た人への支援、科研を取っている人への、いわばインセンティブという形で、初年度は新任の先生とかがいたので額が少なくなってしまうんですけど、そういう形で、部局ごとにしない形で個人配分という形にしました。

ただし、部局には部局のいわば習わしというやり方もあるので、その部局で、うちの学部は、個人の部分は学部としてくださいというところにはそのようにして、内部で配分してもらおうという運営を認めたんですけれども、基本的には個人に配分していくという形を取りました。

○ 大学法人

芸術大学の方は、画家だとか演奏家の方が多いので、もともと科研費に申請する件数が少ないというのが潜在的にあります。これは言い訳にはならないんですが、10年ぐらい前、科研費の応募の項目の中に芸術というど真ん中の言葉がなかったです。自分も1回基盤研究Bを取ったことがあるのですが、その時は自分の専門としている油絵の技法研究から、保存修復につなげていくという研究にして、保存修復の先生と一緒にやって、最終的には、北川民次というこの辺りゆかりの作家なんですけど、その人の化学分析をして技法を解明して、修復までつなげていくという、科研費に応募できるような工夫をして、自分の専門分野も生かせるようにして、採択されたことがあります。これはある意味、

すごく工夫してとった例だと思っていて、毎日ピアノを練習したりバイオリンを弾いたりしている先生たちが、その演奏方法で科研費が取れるかというとなかなか難しく、いろんな方向性はあるのかもしれないですが、そういった意味で、まず潜在数が少ないところがあります。

とはいえ、こういう時代ですから、科研費採択に向けて、事務方のアドバイス等々があって応募をしやすいということ、こちらに公立5大学等々のデータも出ていますが、応募する人は、ちょっとずつベースが増えているというのが現状だと思います。

国の大型助成金を長期で取っている先生等がいて、出す先生というのはある程度限られてきてしまっている状況下での数字だと思ってください。

以上です。

○ 大学法人

一言補足させてください。きちんとしたことを調べてまたお伝えしますが、私の記憶の中では、今年度は、外部の業者の支援というのは、芸大の先生たちも含めて一緒にやっています。その部分では、ささやかですけども、一緒に高め合うという試みはしているところです。

○ 大学法人

小規模なものではあるんですが、研究の助成として、いくつかの企業さんが設定しているところに応募して獲得してるっていうケースがあります。もう1つは、特に音楽の方なんですけれども、実際の日常的な研究というのが演奏だったりすると、科研費の応募にはなかなかそぐわないということがあって、どういうところに焦点を当てれば研究という形になるかということは、もう10年以上前から検討したり、いろいろ相談したりしているんですが、なかなか申請に繋がらないという面はありますが、その点に関しては今後も継続的に検討していきたいと思っています。

○ 委員

科研費に関してはいろんな大学で取り組みがされているので、何かそういうものを情報共有するといいいかもしれません。例えば、若手は年齢に即したランクよりその1つ上を狙った方が採択率が高いとか、全国的な何かそういう傾向があったりするので、上手にデータを使ってやれるといいいかなと思います。

○ 委員

県大の2024年度の方で、外国語学部以外の単位認定を伴う海外留学についてご説明いただきましたけれども、外国語を学んでいる人は学ぶことがはっきりとしているんですけれども、それ以外の方に、例えばこういう機会があるよというのを提示していくうえで、どういったところを選んでいらっしゃるのでしょうか。

○ 大学法人

ご質問いただいたのは留学先、留学する国ということでよろしいでしょうか。

○ 委員

国もそうなんですけれども、大学を選んで、例えば提携していらっしゃるというのがあると思うんですが、その先を選ぶときの基準のようなものは何かお持ちでしょうか。

○ 大学法人

基本的に外国語学部以外というところで申し上げますと、4学部ありますけれども、それぞれの学部で結んでいる協定というのがあります。いろんな国がありますけれども、やはり外国語学部以外の学生が、外国語学部が結んでいる協定の大学に行くというのは、外国語学部の学生と一応競争という形になるのでなかなかハードルは高いんですけれども、それ以外のところだと、教員交流があるところということになります。

例えば日本文化をやっているところだと、南米のブラジル、ペルー、ウズベキスタンだとかそういうところがあります。看護学部でいきますと、オーストラリア、タイ、アメリカだとか、教育福祉系になりますと韓国、ドイツという辺りになってきます。そうすると基本的には、外国語学部以外の学生の留学というときには、まずは一旦自分たちが所属しているところの協定校を考えるのが一般的です。教員もやっぱり紹介するときには、自分たちが交流している大学なので、非常にいろんな面で説明をしやすいというのもあり、一旦最初の段階ではそういうところになります。

○ 委員

最初のきっかけになるというか、提携に至るところの選定はあるのでしょうか。

○ 大学法人

協定を結ぶ段階では、やはりそれぞれの教員が持っている縁というか、研究者仲間がそこにいるとか、そういう国で調査をしていくとか、文書上の関係ではなく、お互いを知っているというところから始まるので、きっかけとしてはやはり教員の研究というのが最初にあると思います。

○ 委員

看護学部は場所もちょうと離れていて、そこの学生と、本体というかそれ以外の学部の学生との交流はどういった形で進められているのでしょうか。

○ 大学法人

後で補足をしてもらいますが、看護学部があります守山キャンパスは離れていますが、守山の看護学部の1年生は1年生のときの教養教育の授業は、バスが動いていて、長久手の方でやります。そうするとその1年間は、長久手に5学部の学生たちが1年生は一斉にいるという形で、その1年間で結構サークルとかいうことも含めた交流を行っているというのが私が認識しているところになります。よろしければ補足をお願いします。

○ 大学法人

今説明してくださったことと関連するんですけれども、1年のときに教養科目等で交流があった学生さんと、学生自主企画というような研究を共同でやるような科目、そういうものがありまして、そのプログラムに情報科学部の学生さんと看護学部の学生さんが一緒になって、保健ツールみたいなものを作るといふ研究がぼちぼち始まっています。

○ 委員

芸術大学と一緒に交流しながら進めていくというお話があったので、看護学部だけがそんなに進んでいないのかなと、ちょっと心配しましたので今お聞きさせていただきました。

芸大の方だったと思いますが、クラウドファンディングを使って整備されたということで、そのクラウドファンディングすることで今まで、大学に接点のなかった方とも何らかの接点ができるので、それについて何か、単にお金が入ったということ以外でプラスになったことはありますでしょうか。

○ 大学法人

地形劇場のときにクラウドファンディングを初めてやったのですが、いろ

んな今まで接点のない方から、逆に先生の知り合いだとか、そういったところからお金を入らせていただきました。全額をこれでやるというよりも、足りない部分をちょっと補おうと思って、そんなお金集まらないよねと思いながら設定したら、倍以上のお金が集まりまして、それに付随して、返礼品として演奏会等も実施して繋がりができて、また現在違う寄付をいただくというように繋がったりもしているので、クラウドファンディングのいい面と悪い面をここ何年かで体験したともいえるんですが、これを使って、違うところに繋がりができたというのは確かです。

○ 大学法人

クラウドファンディングについて補足をさせていただきますと、金額は目標300万円だったんですが、最終的に750万円ほど集まりまして、今回特徴的だったのは、卒業生からの寄付が大変多くて、人数ベースで150名以上の方から寄付をいただいたんですが、半数以上がうちの卒業生からの寄付ということで、こちらもちよっとびっくりしました。それから、支援いただくときにメッセージをいただくシステムがあったんですが、母校を応援していただくメッセージを卒業生から多数いただきましたので、今回はより卒業生と結びつきを多く感じた機会でもありました。

○ 委員

そういった活動も社会との接点の中であると思うので、ぜひ今後も進めていただければと思います。

○ 委員

卒業生からの寄付は、私立がかなり強い繋がりをもっているところがあると思いますが、そういう愛校心が私立は強いようですが、芸術大学もそういう可能性が十分あると思うので、ぜひ今後も続けていただければと思います。

○ 委員

資料1の3ページ目について、県大の1-1教育の項目で評価Ⅳが4項目となっていて、資料4の3ページ目の同じ箇所では3項目となっていますが、1つ減っているというふうに見えていいのでしょうか。

○ 大学法人

2024年度単年では4つをⅣとさせていただいており、第三期全体を通してみたくときは項番1・4・5の3つを取り上げています。2024年度の方は単年で特徴的

な取り組みがありましたので1つ増えています。

○ 委員

芸術大学は、音楽、絵画、デザイン、日本画、彫刻いろいろありますが全般的にすごく活発に地域貢献や展示会、コンサートなどで活躍の場を、大分広げていらっしゃると思っております。ただ、サテライトギャラリーの来場者、Webの検索数というのがなかなか増えないのが残念だなと思っておりますので、その対策というのはいろいろお考えだと思いますが、何かアイデアはありますか。

○ 大学法人

第三期のことについて、この数字が出たということは改善に向けて動いていかなくちやいけないと思っております。サテライトギャラリーは、2016年までは名古屋市美術館近くの坪井花苑という大きな花屋さんの2階にありました。正確に言うと2017年8月に閉めたんですが、その前の年の2016年に8000人近く動員したときがあり、これはあいちトリエンナーレの年です。さらに、この年まで、卒業制作展を愛知県美術館でやっていました。現在は、学内でやっております。なぜ学内にしたかという、愛知県美術館が改修工事に入ったときに、学内でやろうよということで、それは逆に前よりも卒業制作展自体は人が多く来てくれるようになって、それはそれで好評なんですけど、より離れ孤島になってしまったということで、現在移ったところはNHKの北側の、しかも地下にあるギャラリーに移りまして、動員数では苦戦しているというのが事実です。先ほど質の問題と動員数は必ずしも一致しないということを行いました。つまり、アニメや漫画の展覧会をやったら人がいっぱい入ったりということがありますが、うちの大学としてはどうしたらいいのか検討して、若手作家の発表の場を増やしてあげよう、期間を工夫したり、そうやって新しい動きの中でやっていこうということでいろいろ模索してるところです。コロナのときは別にしても、なかなか動員数が増えていかないので、これは改革の中でも積極的に取り組んでいかなくちやいけない項目だということは重々承知しております。

今年度については、他の企画頼りというのも悲しい話なんですけど、今年は国際芸術祭あいち2025がありますので、そのパートナーシッププログラムが8月から11月にかけて4つ、うちも連動して行っていくしますので、増えるといいなと思っております。

○ 委員

データ集の25ページを見ますと、サテライトギャラリーで10以上の展覧会を開催されていて、入場者数が一日平均で二桁ないものもありますので、外部への露出・アプローチで活動を知っていただくのは、なかなか難しいかと思います。ぜひ今回は国際芸術祭に合わせてなんとか集客を頑張っていただければと思います

○ 大学法人

Webサイトの件については、SNSのカウントの仕方が変わって、目標数が達成できていないというのは調べてわかっております。

○ 委員

いくつか数値目標があるんですけども、それに対して明らかに達していないというものに対して、事前の説明会ときもちょっと議論になったんですけども、この自己評価をⅢとしていいのかという話が出まして、Ⅲは先ほどの表だと「十分に実施している」という表現になっている。Ⅳは「目標を上回って実施している」ということで、今回Ⅲという形で出てきているんですけども、今ご説明があったように、数字が達成してなかったときに、トータルの数字は達成していないけれども、何か部分的に見たら伸びている数字があるとか、そういう主張をしていただいた方がいいのではないかと思います。例えば、Webサイトの件についてはカウントの仕方が変わったとのことでしたが、ギャラリーについては何か見方を変えると、コロナ禍の後例えばリピーターが増えたとか、何かそういう分析をしていただくというのが大事なかなと思います。今の件だけでなく、この評価をⅢにするための理由というか、何か持ち出していただかないと、数字だけ並んでいてそれでⅢにするというのはちょっと気持ちのいい話ではなくて、これが表に評価が出ちゃうと、なんだか随分数字が違うんですがという話になってしまうので、やっぱりそこは理由付けをきちっとしていくというふうにしていきたいと思いますので、そういう数値目標を達していないときに、何か上手なデータの取り方とか、表現の仕方をしていただかないと、難しいところも出てくるんじゃないかと思うので、数値目標があるところについては何か分析をして、次につなげるというのが見えるように、ぜひそこをお願いしたいと思います。過去の評価を見ると、Ⅲが並んでいるので、ここでじゃあⅡじゃないですかという話になると、前の評価は何だったんですかっていう話になりかねないのでそれは難しいと思いますが、前向きな議論をするためにやっぱりそういうことも必要かなとお伝えしておきたいと思います。

○ 委員

県立大学の方で、資料2の11ページから12ページで、資料の根拠となるものとして卒業アンケート結果が示されているところがあるのですが、回答率が学部によってものすごく開きがあって、10.8%の外国語学部と、日本文化学部のほぼ90%の間にすごく開きがありまして、最近私の印象では、文科省から、卒業アンケートでは必ずしもなくて、授業評価アンケートが主なんですけれど、アンケートの回答率がかなり厳しく見られるようになっている印象を持っております。そのために全学的に、名古屋大学も昨年度からだったと思うんですが、それまでは学生の自主性に任せて或いは教員の自主性に任せて回答させていたのを、講義の時間内に必ずアンケートに回答する時間を10分程度設けるようにという指示が本部から飛んでくるようになったんですが、アンケートの回答率というのは、かなり厳しく見られているかなという印象を受けていて、卒業アンケートについても、少なくとも我々の研究科ではほぼ強制的に、卒業生アンケートが回収できるように、大学院ですので、必ず最後に口頭試問があるので、その口頭試問を組み合わせるような形で、口頭試問を受けたら卒業アンケートに回答して帰ってもらいたいな、それでほぼ100%の回答率を達成するようにするという工夫をしているんですが、この10.8%ですとか21.1%というのは、ひょっとすると将来的に少し問題になるかもしれません。90%を達成しておられる学部もあるということです。何か全学的なポリシーを導入されるということは可能じゃないでしょうかということ、ちょっと申し上げておきたいなと思った次第です。

○ 大学法人

ご指摘の点は大切なことで、卒業アンケートと授業アンケートはひとまず性格は違いますよね。授業アンケートは私の大学でも、担当事務部署から、授業の最初に10分スマホ出してやらせてっていう、それでリマインドが飛んできたりして、私も今でも半期だけ授業を担当してるものですから、該当するんですけれども、なので実体験として知っているんですね。それで全体的には多分、自主性に任せていた頃よりも回収率は上がっているんじゃないかというふうに思っています。ただ卒業アンケートというのは、全部のことをお話できないので部分的にだけでも、3学部はお答えできるかなと思うんですけど、例えば私は日本文化学部にも所属をしていたんですけれども、回答率が高いです。それは、それぞれに卒業証書を返す場面でやってもらっているわけです。そういうことがあるので、こういう数字がたたき出されているということがあります。

○ 大学法人

看護学部も一同集まるところで、積極的にアンケートをとるような形にしています。

○ 大学法人

外国語学部は、卒業が決まった学生に対してのみ、授与式のところでアンケートを行っているというところが、なかなか回収率が上がらないところなのかなというふうに思っております。

○ 大学法人

教育福祉学部、情報科学部については実態をお調べした上でお答えしなければ、私達の方ですぐにお答えできませんので、そのようにさせていただきたいと思いますが、やはり委員が言及してくださったように全学的ポリシーといいますか方針みたいなものも、回収率に関してというかアンケートに関して、もう考えていかなきゃいけない、あまり学部任せも良くないなど。客観的根拠っていう意味でも、信憑性に関わってくるかなと思いますので、そこは考えていこうと思います。

○ 委員

なかなか授業のアンケートは自主性に任せると、1年生から4年生に向けて回答率がどんどん下がっていき、これを書いても何も期待できないという学生からのメッセージを受け取ることになるんですけれども。強制的にやろうという、100%を目指すというやり方もあると思うんですが、ある部署の教員側から強い反対を受けて、昨年度ちょっと頓挫したんですが、それは回答率100%になると、なかなかコメントを書いてくる者があって、それを受け取った教員は辛いだろうという話で頓挫したんですが、でも回答率は高い方がいいし、海外の大学の回答率がかなり高いんですよね。きちっとそれを先生方が返事をしていて、向こうはかなりやっているんで、自分のことは棚に上げてですけれども、ぜひよろしくお願ひしたいと思います。

○ 大学法人

授業アンケートで自由回答みたいなことをすると学生っていろんなことを書きますよね。なのであるときから私たちの大学では、やはりその授業の改善に資するような意味での指摘・批判というような形のことを、批判はいいけれども節度を持った回答をとというようなことを、ある時から導入しているところ

はあります。しないともう、なんというか切ない気持ちにばかりなるところもあります。

○ 委員

もうそれ自体も教育だというふうにやっていくのがいいのかなと思います。

○ 委員

芸術大学は、こういうアンケートはございませんでしょうか。ちょっとデータが見つからなかったものですから、もしかしたら必要ない学部なのかなというふうに思っております。

○ 大学法人

各専攻で個別に行っているものと、大学全体で行っているものがあって、大学全体が行ってるものがここに記載されているのかな。毎年やっているんですがちょっと不十分なところがありまして、ディプロマポリシーに関連付けたような卒業時に行う満足度調査も含めたアンケートというのは、今検討段階に入っていて、次年度から実施する流れになっています。

資料2の51ページをご覧ください。FDを行っている授業評価アンケートが、毎年大学全体として行われたものです。ただ専門性というのが、美術に関してはもう専門分野に全く違う、方向性も価値観もかなり違ったりするので、大学で行うアンケートは必ずしもその辺を全て網羅できていないようなところがありまして、この大学が行う公式なアンケートの他に、専攻によって若干ばらつきあるんですけども、各専攻で教員が見る個別のアンケートというのがあります。ただそれはデータ化されていないので、こういった公式な書類にはなっていないというのが現状です。

○ 大学法人

座学の授業に関しては一般的な授業アンケートが行われていて、私も経験がありますが、心無いコメントがあつたりするんだけど、どちらかというとあまり真面目じゃない子に限って厳しいことを言う傾向もあつたりするので、そういうものは一定あるということで認識しています。

音楽の方の個人レッスンがメインの授業に対するアンケートに関して、ちょっとコメントしたいんですけども、完全に個人レッスンなので、もう誰が書いたのかすぐわかってしまうということで、強い抵抗もあって、個人レッスンに関するアンケートはやっていなかったんですけども、でも学生さんからの意見には耳を傾けるべきじゃないかということで、個人レッスンに関しても24

年度から、試行的にアンケートをするようになりました。その結果どうなったか、私も個人的に把握してないんですけども、それを今後どういうふうに広げていくのか、これから検討していきたいと思います。

○ 大学法人

回収率については、芸大の場合は、各研究コースにおいて授業時の声かけを強化した結果、講義系が34%から58%、これは全然まだすごい回収率とは言えないんですが、実習の方も21%から53%という、一応向上は見られています。

○ 委員

個人が特定されてしまうというところで、アンケートとしてふさわしくない部分もあること、講義によっては回収率が上がっていることも理解いたしました。

○ 委員

どちらの大学ともカリキュラムの見直しをやっていますが、これは見直しに着手したという段階でしょうか。カリキュラムの改正を実施することを決定とか、見直しを検討したということなんでしょうか。この見直しをするにあたって、まず見直しをする理由とといいますか、どういう目標をもって、どういう課題を解決するために見直しをしようとしているのかというのがちょっと見えにくかったのですが。例えば学生アンケートの結果かもしれませんが、県立大学については新しい科目を開講、それから大学院については連携した教育とありますが、何か目標や課題意識があつての話なんでしょうか。

○ 大学法人

愛知県立大学の場合の第三期というのは、教養教育の新プログラムに現れているように、とにかく縦割りの学部という形ではなく、手をつないだ形で科目を作っていこうという試みが、まず教養教育で行われたわけです。教養教育が新しい定義づけが与えられると、当然のことながら専門科目もどういうふうに位置付け直さなきゃいけないのかという、そういう文脈の中で、3つのポリシーをきちっと見直して、教養と専門はどういう位置付けになるのかというところから、それぞれの学部でできるところで、それまで試みていないこととか少し裾野を広げるとか、今までやってきたものをもうちょっと更新していく、リニューアルしていくというような形の、一種の力学というか要求が働いている。もともとは3期の教養教育で連携していく、例えば今の私たちの大学の1年生は、5学部全部理から文まですべて多文化社会というテーマと、デー

タサイエンスということについては、1学年700人ぐらいの学生全員がその科目を受けるんです。そして全員受ける代わりにこの2つの科目がいっぱい開講されますけれども、5学部の文から理の教員が両方担当することになっているので、いわばそういう形で学部間連携というか、全学連携、部分的連携、そういうことを試みたことの1つの反映としてのカリキュラムの見直しが行われているというのが三期です。かかった時間はそれぞれに違うんですけれども、そういう形になっています。

○ 委員

これは学生さんに何か新しい印象が生まれるとか、学生さんが受け取った印象というか、何か思考が変わったとか、そういうことはありますか。

○ 大学法人

直接的な反映かどうかわからないんですけれども、この連携の仕組みはいろんなところにはめていきました。例えば学生自主企画という課外活動の1つで、自分たちのゼミの継続みたいな単なる研究ではなく、大学から20万かな、お金を渡して自分たちで単位にもならないことをやるという、でもそこでは、情報科学部の学生が看護の学生或いは教員と連携して、健康に関する器具とか端末みたいなものを作ってやっていくとか、それ以外にも、外国・多文化のことを勉強している学生と、教育のことをやっている学生たちが連携していくとか、そういう形で結び合うっていうことを、まだまだ課題ではあると思うんですけれども、サークル以外では交渉がないという話ではない形のもを試みるのは、研究も含めて、三期全体を貫くものだと、そういうマインドは少しずつ学生もできているのかなというふうに思います。やっぱり専門科目となると、専門の中で一旦固定されるんだけど、教養教育でいろいろPBL型のものとかって、グルーピングして議論するときなんかは混ざりますので、その意味では、専門が異なるもの同士の繋がりというのは少しずつ作り上げられてきた6年だったんじゃないかなと思います。

○ 委員

芸大は専攻が強い感じがしますが、カリキュラムの見直しという面で何か強い意図というかこだわりはあるんでしょうか。

○ 大学法人

資料2の項番33に書いてある全学カリキュラム委員会というのは、芸大は来年60周年を迎えるんですが、教養教育の大きな改革はしてこなかったんです

ね。これは逆に珍しいですけども、ガラパゴス的に、教養教育の先生も専門をもって例えば体育の先生だったり、化学の先生がいらっちゃって、良い言い方をしたらそれぞれの専門性を尊重して、皆仲良くやっていくという中でやってきたっていうのが前提としてはあると思いますが、ただ、今変えようとしているのは、芸術大学らしい教養教育という姿があるんじゃないかっていうことで、わかりやすく言うと例えば、体育の先生を創作ダンスの先生、アート寄りの人を呼ぶだとか、英語でも芸術分野にからんでいる人を呼んだら、より学生の目線に立った教養教育っていうのがあるんじゃないかっていうのが、大きなコンセプトです。あと、もっとテクニカルなこと言うとメディア映像専攻が完成年度を迎えまして、新しいカリキュラムを変えるタイミングという学部的なこともあって、2026年度にまずここを変える、30年度には我々が目指している全部をやろうと、いわゆる次の中期計画期間中にやろうという年度設定です。

あともう1つ付け加えると、博士課程とか、教養教育の先生にも手伝っていただかないとだめなくらい、今いろんなことが重なってきてますので、そういった協力体制をとりながら変えていこうと、今いろいろな議論を重ねながら、そっちの方向に行くように改革を進めているところです。

○ 委員

芸大はキャリアサポートも力を入れています、学生の素養がそういう教養教育で上がっていくと、就職活動にも生きてくるいろいろなところで言われているので、ぜひ進めていただければと思います。

今ご説明いただくと非常によくわかるんですが、資料だけ見るとそういう思いが書いてないようなのが残念に思います。

○ 大学法人

今の延長線上で、今度は県大と芸大の2大学連携を、特に教養課程をイメージしてやっていこうとしているんですが、ワーキンググループを作って、第四期中に県大と芸大の連携授業をやっていくということを考えています。芸大と一般大学が連携した授業はなかなかないので、アート思考みたいなものが県大サイドはいるし、芸大サイドは一般教養みたいなところをそういった連携授業で取り入れられたらいいと思うので、私の方からも両大学にお願いしているところです。

○ 委員

他の大学でも同じように、共通教育はコンテンツを揃えて、それぞれが持つ

ているリソースを出して良い教育をした方が、地域としてやった方がいいんじゃないかというのがあります。そこからシステム作りというのは意外とお金がかかったりするので、そこは手当をしていただかないと一気に進まないということがあるので、ぜひ良い仕組みを考えていただいて、予算を取って一気に進めていただけるといいと思います。

○ 委員

また他のご意見も聞いて、最後に何かあれば伺いたいと思います。一通りご意見をいただきましたが、かなり前向きなご意見だったと思います。表記の仕方だとか、目標値に達していなかったときの理由付けだとか、解決方法なんかの提示をしていただくとか、積極的にそれはしていただいた方がいいと思います。次回の資料に、いただいた意見を参考にさせていただければと思います。

(3) 役員報酬規程の改正について

○ 委員

この件に関しては特にご意見なしということでよろしかったでしょうか。
(意見なし)

【その他】

○ 委員

運営についての意見ではないんですけれども、最近オンラインカジノを子供たちもやれるような時代になっているように見聞きしております。個人の問題なので、大学がどうこうというものではないと思いますけれども、何か注意を喚起するような機会があれば、しておいた方がいいのかなというふうに思っております。それは社会人も同じですけれども、知識がない方が多いので気をつけてほしいなと思っております。

○ 愛知県

オンラインカジノの問題は県議会でも今回いろいろご質問もあったところで、県立大学だと依存症の専門家に、先月6月に講演をしていただくようにやってもらいまして、多くの学生に出席いただいて、オンラインカジノそのものが違法な行為なんだと、そういう根本的なところも説明をいただいております。

す。私どもは青少年も担当しておりますので、そういういろんな場面で、オンラインカジノは違法だとか、そういうことについても周知しなきゃいけないなと思っておりますので、ご指導いただければと思います。

○ 大学法人

最近いろいろな、例えば麻薬の問題ですとか大麻の問題ですとか、本学だと喫煙で近隣とのトラブルがあったりして、先日依存症をからめて専門家による学生向けのセミナーを開きまして、学生に集まって聞いてもらいました。そういったものと学生相談も併せまして、薬物、カジノもちょうどタイミングよく出てきましたので取り上げさせていただいて、継続的に指導していきたいと考えております。

○ 委員

心身ともに健康な若者に育てていただくよう、ぜひお願いしたいと思います。

○ 委員

全体を通して、他にご意見はございませんか。
(意見なし)

○ 委員

それでは進行を事務局にお返しいたします。

○ 事務局

次回8月5日に開催する評価委員会では、本日の質疑の内容を踏まえまして、評価案について審議をいただく予定ですので、よろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

以上

会議録署名人

会議録署名人